仁徳天皇

然後大山守皇子每恨先帝廃之非立

然る後、大山守皇子、毎に先帝の廃てて立て

てまはざることを恨みて

【之】

01

今我也弟之

今我は弟なり

則謀之

則ち謀して

唯愛之者也

唯愛したまひてなり

時太子設兵待之

時に太子、兵を設けて待つ

僕之不佞

僕は不佞(みつな)くして

夜半發而行之

夜半發ちて行く

祚之以嗣

祚(さいは)へたまふに嗣を以て

更浮流之

更に浮き流れつつ

授之以民

授けたまふに民を以て

歌之

歌よみして

各相譲之

各相譲りたまふ

既而興宮室於菟道而居之

既にして宮室を菟道に興(た)てて居します

皇太子謂之

皇太子謂りて

爰皇位空之

爰に皇位空しくして

即率吾子篭而来之

即ち吾子篭を率いて来り

乃返之

乃ち返して

傳聞之

傳に聞(うけたまわ)る

更返之

更に返して

是謂山守地非之也

是を山守の地と謂ふは非ず

豈久生之

豈に久しく生きて

而赦之勿罪

赦して罪せず

以驚之

以て驚きて

從難波馳之

難波より馳せて

今百姓の貧しきは

百姓富之

百姓富めるは

爰太子薨之経三日

爰に太子、薨りまして三日経りぬ

未之有百姓富之君貧矣

未だ有らじ、百姓富て君貧しといふことは

自逝之 自ら逝く

80

具奏兄王聖之且有譲矣

具に兄王の聖にして、且(しばしば)譲りますこ

と有(ま)しませることを奏さむ

九月諸国悉請之

九月に諸国悉く請して

懼之其獲罪于天乎

2 懼るらくは、其れ罪を天に獲むか

語之

語りて 然猶忍之不聽

然れども猶忍びて聽(ゆる)したまはず

04

朕登高臺以遠望之

朕高臺に登り遠く望む

故、群臣共に視て

故群臣共視之

05

是日始之 是時有兩處之築而乃壊之難城塞

是の日より始めて 是の時に、兩處の築(つ)かば乃ち壊れて塞ぎ

難き有り

10

06

而遠望之 有神誨之

遠かに望みたまふに 神有しまして誨(おし)へて

殿屋破之 則第二人而待之 別ものはいずつ

殿屋破れて 則ち覓(ま)ぎて得つ

顧みて身を責める 爰に強頚、泣き悲びて

今百姓貧之 11

請之

請ひて

24

故默之

故、默して

河神祟之

河神祟りて

25

聞天皇合八田皇女而大恨之

14

時高麗客等見之 時に高麗の客等見て 天皇、八田皇女を合しつと聞しめて大いに恨

みたまふ

15

更引之

更に引きて

是以其百姓毎年豐之

是を以て其の百姓常に年豐

乃歌之

乃ち歌よみして

20

自南門直指之

南門より直に指して

皇后不還猶行之

皇后還りたまはずして猶ほ行でます

皇后に謁すと雖も、默をりて答したまはず

以墾之

以て墾(は)りて

歌之

歌よみして

故其處百姓寬饒之

故、其の處の百姓寛(ゆたか)に饒(にぎは)ひ

て

而居之

居(ま)します

26

21

雖謁皇后而默之不答

仍以歌問之

仍りて歌を以て問ひて

而流涕之

於是播磨國造祖速待獨進之

是に播磨國造の祖速待、獨り進みて

流涕(かなし)びて

何爾泣之

23

何ぞ爾が泣(いさ)つる

於是新羅人懼之

是に新羅人懼(かしこま)りて

時皇后謂之

時に皇后謂りて

口持則返之

口持則ち返す

隼別皇子密婚而恨之

隼別皇子密かに婚(たは)けることを知りてた

まひて恨みたまふ

27

時桑枝沿水流之

時に桑の枝、水に沿ひて流る

而忍之勿罪

忍びて罪せず

歌之

歌よみして

乃語之

乃ち語りて

32

其聲寥亮而悲之

其の聲、寥亮(さやか)にして悲し

而勃然大怒之

而勃然大きに怒りて

問之

問ひたまふ

追之所逮

追い逮(し)かむ所に

聞鹿聲而慰之

雄鯽等追之

雄鯽等追ひて

鹿の聲を聞きて慰む

而殺之

殺しつ

吾今夜夢みらく

吾今夜夢之

自裳中得之

白霜多降之覆吾身

白霜多に降りて、吾が身をばと覆ふ

裳の中より得る

34

時宿人心裏異之

時に宿れる人、心の裏に異ぶ

則疑之

則ち疑ひて

33

而久之不復命

而取之

取りき

久に復(かえひごと)命(まう)さす

35

時為皇女織縑女人等歌之

時に皇女の為に織縑女人等歌よみして

爰に酒君来て

爰酒君来之

則欺之

則ち欺きて

新羅潰(にげあか)れぬ

因縦兵乘之

因りて兵を縦ちて乗り

久之天皇遂赦其罪

久にありて天皇遂に其の罪を赦したまふ

40

43

44

45

36 時人聞之流涕

故奇而獻之 時人聞きて流涕(かなし)ふ

故、奇びて獻る

是後蝦夷亦襲之

亦捷飛之 是の後に、蝦夷亦襲いて

亦捷く飛びて

乃ち還りて

37於是天皇詔之於茨田堤鴈産之是に天皇詔して

茨田堤に鴈産めり

甚懼之

39 **甚だ懼(かしこ)し**

乃還之

自大井河流之

則詔之 大井河より流れ 則ち詔して

而自南海運之

挙兵撃之 南海より運して 兵を挙げて撃つ

新羅兵を起こして距ぐ 時に皇子山の上より望(おせ)りて

11±1/5.\

則掠俘之 還来之

則ち掠俘(とら)ふ 還り来りて

故、伺ひて左を撃たば 問ひて 新羅潰之 啓之

啓して

其用之

其の用(つか)ふこと

天皇歓之

天皇歓びたまふ

46

而誅之

誅(ころ)さしむ

48

走之

走りて

即百舌鳥自耳出之 即ち百舌鳥耳より出で

49

汝沈是瓠則余避之 汝是の瓠を沈めば則ち余避く

悉斬之

悉く斬る

【者】

10

今朕視是国者

今朕是の国を視れば

II

若不得沈匏者

若し匏を沈むることを得ずは

39

若新羅距者

若し新羅距(ふさ)がば